

London

*Creative Scene

次代をになうのは誰？

イギリス卒業制作展事情'98

安積伸

text by SHIN Azumi

毎年6月から7月にかけ、英国のデザイン系大学はディグリーショウ（卒業制作展）の季節を迎え、にわかに活気づく。各学校では学内展をはじめ、ロンドンの中心街などに場所を移した展覧会を持つ学校も多く、オープニングパーティなども催される。今回のLondon Creative Sceneは、そんな中からより抜きの作品を紹介し、98年夏の英国デザイン学生卒業制作展の空気をお届けする。

英国のデザイン教育機関で、やはり最も注目しているのがRoyal College of Art（以下RCA）であろう。同校は大学院大学であり、本年より家具デザイン科の教授にロン・アラッドを迎えたこともあり、英国デザイン界のスターが教鞭をとった成果に注目が集まった。

Gitta Gschwendterのペンダントライト「Strangled Light」は、配線ケーブルが円筒形のランプシェードを縛り、だらりと垂れ下がった造形で、照明器具における新しい傘と配線の関係を提案している。

Carl Clerkinの「Drawer Light」は、一見何気なく壁にとり付けられた引き出しだが、上段の奥にライトが仕込まれている。引き出しの開閉具合で明るさを調節し、完全に閉じると電源が切れる仕組みになっている。

GschwendterとClerkinはRCA卒業後共同で事務所を設立し、当面は自らのデザインを製造販売までこなすデザイナー・メーカーとして活動していく予定で、今回の卒業作品は今後そのまま彼女たちの商品ラインとして展開されることになる。この様に卒業後の展開を踏まえ、市場でそのまま競争力を発揮しうる完成度の高い作品が発表されるのも学生の年齢層が高いRCAならではと言える。

また、コマーシャルな方向性を求める学生がいる傍ら、一方で実験的なデザインも健在だ。日本人学生、堤舞子の「Luminous Chair」は、蓄光シートを樹脂の中に歪めて封じ込めた椅子である。光の下と闇の中で違った表情を見せるこの椅子は、光の下で見えているものが全てであるとする私たちの日常的な錯覚に疑問を投げかけている。RCAインダストリアルデザイン科は、ともすれば複雑化するモノ（object）の存在を

電灯と違い、配線に煩わされず、どこでも簡単に持ち運び出来る光源として小型ペンペンによるガス灯を見直し、その構造と機能の直接的な関係が、簡潔で凛々しいデザインとして昇華されている。

Dina Shaharの「Contemplative Well」は井戸の形を借りた、インフォメーション表示モニターのシステムである。公共の場での情報表示モニターは通常頭上高く設置されているが、この作品は井戸型の円柱の底にモニターを仕込むことで、井戸の縁によりかかってモニターをのぞき込むようにデザインされており、利用者にリラックスした体勢とモニター画面への集中を促している。また余談であるが、RCAインダストリアルデザイン科は、次期よりロン・アラッドが家具科と同時に教授職に就くことになり、来年の成果が楽しみに待たれるところである。

ロンドンのBusiness Design Centreでは毎年、全国の美術系大学合同卒業制作展である「New Designers」が催される。掃除機メーカーのdysonや、家具のHabitat等が協賛し、展示している作品に様々な賞が用意され、無名の学生が脚光を浴びるまたとないチャンスになっている。それだけでなく同展は、企業や学生にとってリクルートのための重要な拠点にもなっている。

地方の美術大学もそれぞれに個性的である。チャールズ・レニー・マッキントッシュの建築で有名なGlasgow School of Artの卒業生Bob McCaffreyの携帯電話「Ringos」は指輪タイプのデザインで、親指にスピーカー、小指にマイクロフォンの機能を備え、小指と親指を立てて耳に持っていく「電話をかける」というセズチャーがそのまま、電話をかける行為となっている。

英国は現在、久々に戻ってきた好景気で国全体に追い風が吹いている状態だが、まだまだ若いデザイナー志願者には厳しい状態が続いている。あくまで即戦力を求める企業やデザイン事務所と、就職以外にデザイナーとして自立の方法を模索する学生達の努力が、作品の質の向上に一役買っている事は確かである。しかし製造業の衰退した近年の英国では、卒業制作が注目を集めて

写真左：[Strangled Light] ギタ・シュヴェンダー
左下：[Luminous Chair] 堤 舞子
下：[Contemplative Well] ダイナ・シャハール

